

# ロンドンで学ぶ演劇教育連載④ 続スタニスラフスキー・システム

飛田 勘文  
(ドラマ教師・演出家)

二〇〇六年の二月と八月に、私はロシアの演劇学校が開催する初級俳優のためのワークショップに参加しました。二月には実際にロシアへ渡り、メイエルホーリドの影響を強く受けている「ロシア舞台芸術アカデミー(GITS)」に通い、また八月にはロンドンで、スタニスラフスキーの伝統を受け継ぐ「モスクワ芸術座付属演劇学校(MXAT)」の主催する講座を受けました。異なる伝統を持つ二つの学校を訪れましたが、両校共に、その段取りが非常に酷似していたのが印象的でした。ワークショップは主に二つの内容で構成されており、俳優の精神



sピオメハニカの授業風景

を訓練するためにスタニスラフスキー・システムを使い、身体能力の向上を目指して、マイケル・チェーホフやメイエルホーリドのメソッドを取り入れていました。

私が受けたワークショップでは、はじめに「発見」と「反応」という二つの能力を高める訓練が行われました。これは、スタニスラフスキー・システムにおける「精神と身体の一体化」の考えに由来するものです。俳優が上辺だけの演技に陥って精神(思考)を停止させることのないよう、講師は俳優に対して、自分の置かれている状況(自分の精神状態)、他人の動き、空間・環境の変化)を徹底的に観察するよう求めました。そして、俳優がそこから新しい情報を見つけ、それに対して身体的な反応を示すよう鍛えられました。しかし、俳優がいくら新しい情報を発見しても、身体が自分の精神の指示通りに動いてくれなくては意味がありません。正確な反応が失われてしまえば、

そこから新しい情報を読み取ろうとする観客や他の俳優達の間で、次に登場するのがチェーホフです。彼はスタニスラフスキーに異を唱え、「強調すべきは俳優の感情でなく、登場人物の感情である」と述べ、俳優の精神から登場人物の精神を切り離してしまいました。ところが、たとえ仮の精神であったとしても、精神がその動きを身体に伝えようとしている点については、両者とも意見を同じくしているようです。それゆえに現代では、精神に対する身体への注目したチェーホフの訓練方法もまた、別の方法による訓練と一緒に活かされています。

ワークショップでは、チェーホフの「サイコロジカル・ジェスチャー」を応用した訓練が行われました。精神の動きが身体に伝わる時、俳優は緊張や不安から、時として無意識のうちに自分を庇うことがあります。その状況下では、俳優の精神は創造を放棄し、身体は自分のよく知る最も安全な動き(癖)を行います。そこで、この訓練では、演技中の俳優に講師が強烈なプレッシャーを与え、俳優がそのプレッシャーから逃げたために無意識のうちに繰り返してしまう同じ動きを発見します。そして俳優は、それを自分の精

神が創造を放棄した結果と認め、その動きを避けるように努力します。つまり、この訓練では、身体の動きを変えることで、なかば強制的に緊張や不安から自分を庇おうとする精神の動きをも変更してしまいます。

これらのワークショップと平行して指導されたのが、精神よりもむしろ身体にのみ焦点を当てたメイエルホーリドのピオメハニカでした。彼はスタニスラフスキーの教え子ですが、師の唱える俳優と登場人物との同一化を否定し、俳優に必要なものは、舞台にいるその瞬間に「最も相応しい身体形」を創造することだと主張しました。「身体形が正しければ、登場人物に必要な話し方や情緒も正しいはずだ」というのが、彼の考え方です。

ピオメハニカの講座では、私たちは常に「意識した動き」を求められました。俳優の演技は、時として安定感のない、小さな動きになりがちです。ピオメハニカは、この問題を改善するため、一つひとつの動きを丁寧に観察し、より細かく分解していくことで、無意識に流してしまっている体の動きを見つけていきます。そして、無意識がもたらす不安定で小さな演技を、意識することによって安定した大き

な演技へと変えます。メイエルホーリドの演技に対する発想は師と異なりますが、実際のところ、この変化の過程において、無意識ゆえにバラバラだった精神と身体は、意識するという自覚によって結果的には一つになります。

このように、現在のロシア演劇では、三人の演劇人が残したメソッドを統合する形で演技術の伝統が守られています。三者三様に演技に対する考え方は異なるものの、その中核となる発想は「精神と身体一体化」です。

日本でも「精神と身体一体化」に強い関心が向けられていますが、即興による自由な表現を代表例として、多くの活動は、精神面から身体の動きに迫ったスタニスラフスキー的アプローチが多いように思われます。しかし、私はこの体験から、表現者が真に精神を解放するためには、それに見合うだけの身体能力を得ることが必要だと学びました。

※人物名の表記は『コンサイス人名辞典 外国編』(三省堂編修所編纂、三省堂出版、一九七六年)に基づきました。

【編集委員】石坂慎二／上保節子／菊田朋義／林 陽一／ふじたあさや

## 第16回アシテジ世界大会

●オーストラリア・アデレード市  
●二〇〇八年五月九日〜18日

二〇〇八年五月九日〜18日

第16回アシテジ世界大会が、

二〇〇八年五月九日、18日、オーストラリアのアデレード市で開催される(三年に一回開催)。

アデレード市は、サウスオーストラリア州の100万都市。オーストラリア大陸の南海岸線、中央やや東側に位置する。

アデレード市では、一九八七年4月に第9回世界大会が開かれ、二度目の世界大会となる。日本からは、栗原一登会長他17名が参加している。

故きを温ねて新しきを知る

大会のテーマは「OLD KNOWLEDGE, NEW WORLD」。直訳すれば「古い知識、新しい言葉」となるが、日本流でいえば「温故知新」「故きを温ねて新しきを知る」とい

つたところか。

第16回世界大会では

オーストラリア国内の演劇・ダンス・サーカス・人形劇団の出演による「オーストラリアショーケース」、世界各国から招聘しての「国際ショーケース」、「第16回世界大会の会議」、「フォーラム・ワークショップ」など多彩に開かれる。

また25歳から35歳までを対象とした「次世代のリーダーを育てるプログラム」を「目玉」にしたいとのこと。

アシテジ日本センターではアシテジ日本センターではツアーを組む。前回のモントリオール大会は、日本から57名が参加(劇団えるむを除く)。前回は上回る参加が予想される。

### アシテジ日本センター

#### 第26回定期総会のお知らせ

- ◆ 期日 二〇〇七年五月28日(月) 午後2時
- ◆ 会場 国立オリンピック記念青少年総合センター 国際交流棟 第2ミーティングルーム

## ソウル「アジアフェスティバル」 かがし座が招聘公演

今年の夏、7月21日〜25日、劇団かかし座(後藤圭代表)がソウルでの「アジアフェスティバル」に招かれ、「長靴をはいたねこ」(シヤルル・ペロー原作/後藤圭脚本・演出)を上演する(4回公演を予定)。

○ アシテジ韓国センターでは、二〇〇二年の世界大会を視野に入れ、二〇〇一年から従来の国内フェスを「ソウル国際児童青少年演劇フェスティバル」として、ヨーロッパの優れた作品の招聘公演を行ってきた。今年はこのフェスティバル期間中に、「アジアフェスティバル」を開催することになった。

○ 日本の他に中国などアジア諸国の劇団が招聘される予定。

○ ソウル・上海・台北・沖縄など、それぞれ「児童青少年演劇フェスティバル」を開催している市が、特にヨーロッパなど遠隔国の招聘の費用の軽減をはか

○ 劇団たんぽぽも「100万回生きたねこ」(佐野洋子原作/久野由美脚色/ふじたあさや演出)でフリンジ参加をする。



s「長靴をはいたねこ」

この機関紙『アシテジ』も、一九七九年7月に第一号発行以来、来年1月号で100号を迎えます。

ASSITEJ Japan Center

No. 97 (2007. 4)  
国際児童青少年演劇協会  
日本センター  
〈略称・アシテジ〉  
〒102-0085  
東京都千代田区六番町13-4  
浅松ビル2A  
TEL 03 (5212) 4773  
FAX 03 (5212) 4772  
Mail: centre@assitej-japan.jp  
Web: http://www.assitej-japan.jp/  
発行者 アシテジ日本センター

# 韓国の児童青少年演劇

## 「新しい出発」次の10年に向けて

キム・ビョンホ

Kim Byung-ho

(韓国ソウル演劇協会)

韓国の児童青少年演劇界にとって2000年という年は、そのすばらしい発展と多様性の面で記念すべき年でした。それまでの児童演劇作品の殆どは昔話やお伽話をそのまま舞台にのせるといった単調なものでした。しかし現在では、さまざまな実験的試みが見られ、この分野における創造性が重視されるようになりまし。そのような変化をもたらしたのは主として15年前に韓国アシテジ(国際児童青少年演劇協会)によって創設された「ソウル児童演劇賞」に負うところが大きいといえます。

この賞を象徴とする背景の中で演劇人の創造力が刺激され、専門的な児童劇団が発展し、2002年にはソウルにおいてアシテジ世界大会などの国際行事を組織するに至って、韓国の児童青少年の存在を世界に知らせる機会となりました。



s 劇団サダリ「河馬がとぶ」

のオーストラリア世界大会にも以上の理由から大きな期待を抱いています。私たちは共にお互いの知恵を絞って創造的思考を高め合おうではありませんか。各個人、グループ、団体それぞれに課題が見つかるはずですが、私は演劇の仕事をしています、それは演劇がこの社会に必要なものだと思っているからです。

ソウルでは今、この冬何度目の雪が降っています。私はいつも演劇の仕事をしている人々に感謝しています。私たちはお互いに協力し、自分一人では出来ないことを他の人が補って仕上げるからです。それぞれが演劇の中に喜びを見だし、健康でありますように願っています……。

(2006年11月30日)



s ムーンアンドチャイルド「猫が話した」

創造性の面で韓国の児童青少年演劇は、その内容、形式ともに多種多様になりつつあり、これは大変望ましい状況です。まず第一にあげられるのは、教育機関の積極的な貢献です。一例は国立芸術大学における大学院

専門課程(M.F.A)の「児童青少年演劇」コースの設置などがあげられます。最近ではその卒業生たちが創造グループを結成して独自の活動を展開し、また海外留学経験者たちも人形劇団を結成する

### 「銃口」が

### 考えさせてくれた日韓の関係

### 「銃口」が架けた日韓の橋を読んで

青年劇場は一昨年(二〇〇五年)10月11日、11月20日、『銃口』教師・北森竜太の青春(三浦綾子原作、布勢博一脚本、堀口始演出、大屋寿朗製作)で、韓国14都市で公演を行った。本書はその「銃口」公演を観劇した、韓国の言論陣による座談会を主に、七章で構成されている。

えてしてこの種の本は「青年劇場の『銃口』韓国公演は、大成功!!大成功!!」といった賞賛の声で埋まりそうなものだが、この本は決してそうではない。むしろ私たちに、日韓の歴史、今後の日韓のありようなどに対し、鋭く迫り、厳しく考えさせてくれるところが多い。そういう意味でも、最も深く考えさせられたのは、第六章の「銃口」が変えた「日本観」である。

司会は編著者の黄慈恵(ファン・チャヘ)さん。出席者はソウル中央高等学校歴史教師の崔鉉三(チエ・ヒョンサム)さん、釜山大学教師範大学歴史教育科教授の梁正鉉(ヤン・ジョンヒ

など活発に活動しています。いずれのグループも各自の特色を発展させつつ多様なテーマと形式に取組んでおり、韓国の民話、昔話、伝統的表現、影絵劇、人形劇、ミュージカル、マイム、舞踊などがあります。言うまでもなく従来のやり方で活動している劇団も多く、そのどちらのやり方が良いか悪いかの判定を下すことは適切ではないといえます。大切なことは、韓国がこの分野において活気ある活動が展開されているという事実です。近年における韓国の文化芸術政策は教育面に力点が置かれ、従って演劇を通じての教育の振興が着目されています。そこで韓国アシテジの役割はいよいよ重視されつつあります。これまで韓国の児童青少年演劇発展に尽力してこられた金雨玉氏その他の方々のおかげで、これからの10年間は実り多い年になるに違いありません。すでにその時代は始まっており、未来の見通しは明るいと云えます。それは国内の演劇界の連携ばかりでなく、アジア諸国、とりわけ韓国、中国、日本の間での演劇国際交流の充実発展の見通しです。これまでの韓、中、日における共同制作などの国際協力の実績を土台として、韓国児童青少年演劇はますますアジア児童青少年演劇の交流発展の為に貢

貢するに違いありません。すでにその時代は始まっており、未来の見通しは明るいと云えます。それは国内の演劇界の連携ばかりでなく、アジア諸国、とりわけ韓国、中国、日本の間での演劇国際交流の充実発展の見通しです。これまでの韓、中、日における共同制作などの国際協力の実績を土台として、韓国児童青少年演劇はますますアジア児童青少年演劇の交流発展の為に貢

貢するに違いありません。すでにその時代は始まっており、未来の見通しは明るいと云えます。それは国内の演劇界の連携ばかりでなく、アジア諸国、とりわけ韓国、中国、日本の間での演劇国際交流の充実発展の見通しです。これまでの韓、中、日における共同制作などの国際協力の実績を土台として、韓国児童青少年演劇はますますアジア児童青少年演劇の交流発展の為に貢

貢するに違いありません。すでにその時代は始まっており、未来の見通しは明るいと云えます。それは国内の演劇界の連携ばかりでなく、アジア諸国、とりわけ韓国、中国、日本の間での演劇国際交流の充実発展の見通しです。これまでの韓、中、日における共同制作などの国際協力の実績を土台として、韓国児童青少年演劇はますますアジア児童青少年演劇の交流発展の為に貢

貢するに違いありません。すでにその時代は始まっており、未来の見通しは明るいと云えます。それは国内の演劇界の連携ばかりでなく、アジア諸国、とりわけ韓国、中国、日本の間での演劇国際交流の充実発展の見通しです。これまでの韓、中、日における共同制作などの国際協力の実績を土台として、韓国児童青少年演劇はますますアジア児童青少年演劇の交流発展の為に貢



セウゴンステージ「オズの魔法使い」

韓国アシテジは現在、第15回夏季演劇祭第3回冬季演劇祭、そして第14回ソウル児童演劇賞に向けて準備中です。これらの三つの行事は児童青少年演劇の仕事に携わる人々にとってその努力が報われ、評価される重要な機会となっています。単に手を拱いて助成をまっているのではなく、自分たちで協力し努力して活動が続けてきた結果がこのような形となって結実したのです。その中心としての韓国アシテジは、その演劇人会員ならびに観客会員が共にこれらの行事に参加し、毎年その充実と発展を推進しています。

言うまでもなく、このような活動の成功はソウル市、韓国芸術院、文化観光局の助成なくしてはとて困難なことでした。これらの公的助成が触媒の役割を果たして演劇人の創造活動を奨励し促進しているのです。

2007年夏(7月21日、25日)ソウル市においてアジア演劇祭開催を予定しており、そこには多くの地域からの多様な児童青少年演劇グループが参加する予定です。また世界各地の主要な演劇祭の演出家15名以上を招待します。私はこの演劇祭が多くの人々に出会いの場を提供し、今後の共同制作やワークショップなどの協力への道を開く機会となることを切望しております。特に韓国アシテジと日本アシテジとが相互に演劇交流を深めると同時に、共にひろくアジアにおける児童青少年演劇の発展と交流を考える場となることを願うものです。

韓国と日本の児童青少年演劇はいずれも1999年のトロムソ(ノルウェイ)、2002年のソウルのソウル、2005年のモントリオールなどにおいて、その質の高い作品や可能性によって国際社会に深い印象を与えました。これらの実績から、この両国の国際協力によって多くの困難を克服出来ると私は確信しています。また同様に2008年

と云う具合である。紙面が尽きた。とにかく忙しい方は、この第六章だけでも読んで欲しい。この本は、編集者の意図もあるが、日韓の問題点を炙り出してくれている。私には考えさせられることが多々あった。この本に触れられたことに感銘の念すら覚える。最後に余計なことだが、私がこの本のタイトルをつけるとしたら、『銃口』が考えさせられた日韓の関係』とつけるだろう。新日本出版社、千600円+税。青年劇場まで。(石坂)

## 2007国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ

### キジムナイルフェスタ 予告

例年のように、今年も又、標記フェスが開催される。開催日は、7月21日、29日、会場は、沖縄市市民小劇場あしびなー、市民会館他の色々々などで行われる。海外招待作品公演は、15、20作品で、候補として「ハムレット」／「ロミオとジュリエット」(以上、演劇・デンマーク)／「チェーホフの手帳」(パレエ・スイス)／「雲のぼうけん」(ドイツ)／「パラシュート」(クロアチア)／「小さな紳士」／「ヘラクレス」(以上キプロス)／「しあわせなハンズ」／「家族」(以上ロシア)／「ハニン」(パレスチナ)／「はきだめのHumantiyog」(ヨルダン)以上、演劇／「カルゴ」(人形劇・カナダ)／「ODYSSEY」(舞踊・インド)／「西遊記」(京劇)／「雑技」(以上、中国)／「サーカス」